

いれずみ物語

— 13 —

小野 友道

龍の彫り物

— 北京は四合院で想う九紋龍史進 —

北京には“胡同”と呼ばれる古い町並みがわずかに残されている。そこにある四合院造りの屋敷を改築した「侶松園賓館」の朝6時、まだだれもない中庭に一人腰掛けて、前日購入した『中華龍』を読んでいた。ふと空を見上げると、青空に白雲がいろいろな姿を変えながらゆったりと流れていった。天空は四方を独特な屋根瓦で縁取られた額縁の中にあった。と突然、雲は龍となり空を飛泳した。

2006年夏、畏友阪口薫雄先生（熊本大学免疫学教授）、頼仲方一先生（同病態機能薬理学）と筆者は、北京協和医科大学との研究打ち合わせで北京を訪れた。何回目かの北京であったが、今回は阪口教授のお世話で、姿を消す運命にあるであろう胡同の宿を予約した。天空の龍を眺めながら、『水滸伝』の九紋龍史進の花繡を想った。

*

「又請高手匠人。興他刺了這身花繡。肩臂胸膛。總有九一條一龍。滿縣人口一順。都叫他做九紋龍史進」『水滸伝』の一節である。北宋の皇帝徽宗は気ままであった。高俅という蹴鞠の名人を登用したが、長官になった高俅への挨拶を、病気のため欠席した王進を責めた。王進は命危うしと母親を伴って逃亡した。最初に世話

になった史家村で、王進は、大肌脱ぎになって、総身には青い龍の彫り物をした若者と試合して負かしてしまう。若者の父、史家村の大旦那から王進への会話の末尾が、先の原文である。「師範どの、お聞きくださいませ。…わたしのせがれは、小さい頃から百姓が嫌いで、槍法棒術だけが好き。母親は、言い聞かせてもききませんゆえ、それを苦にして死にました。わたくしもこのうえはと、こいつの好きなおりにしてやり、どれだけ金を使って、先生に稽古をつけさせてもらいましたことやら。その上、上手な職人に頼んで、この彫りものをしてやりました。肩腕胸と全部で九匹の龍、県中の口さがない人人、みな呼んで九紋龍史進とっております」原文に「花繡」とあるのが興味を引くが、坪内逍遙が『当世書生氣質』の中で「花繡」を引用し、「ほりもの」と読ませている。

さて、『水滸伝』は、伏魔殿から黒い煙立ち上り、幾十幾百筋の光となって四方八方に消えた妖魔が、百八人の豪傑として活躍する痛快物語で、その一人が九紋龍史進である。『水滸伝』の日本への渡来は江戸の初頭らしい。その後、岡島冠山翻訳『通俗忠義水滸伝』（宝暦7年）をはじめ、絵本を含めいろんな形で読まれるようになり、将軍から庶民に至るまで、江戸の人は

『水滸伝』を愛読した。川柳にも「留守番へ飯のありかと水滸伝」とある。特に滝沢馬琴の『新編水滸画伝』は、より通俗的で、北斎の挿絵で人気を呼んだ。これが彫り物に大きな影響を与えた。さらに文政10年の歌川国芳の浮世絵で、水滸伝気取りがはやり、江戸の彫り物は最盛期を迎える。なかでも九紋龍は、龍が水を呼ぶというわけで、鳶の仲間に喜ばれた。川柳に「大纏九紋龍がかつぎ出し」がある。「今でも東京の鳶で文身をして居る人の住人の中九人迄は必ず何処かに龍の文身がある」と『文身百話』（昭和11年）に記されている。なお、馬琴の『南総里見八犬伝』は『水滸伝』の影響を受けたが、物語の始まりは、里見の復興を託され逃げる義實の船旅、浪高く、一天俄にかき曇り、「廻翔る雲の中に、物こそあれ、と見る目まじゆ観く、忽然と白龍頭れ」、南の空に消える。それを見た義實は安房へ向かう決心をする。馬琴は龍について事細かに記しており、その知識は驚くほかない。

そんな昔の話でなくとも、『水滸伝』の影響は大きい。『刺青・性・死 逆光の日本美』の松田 修も、「兄の本棚から、いてふ本の『新編水滸画伝』を見つけ出したときのしびれるような喜びを、どう表現すればよいのだろうか。張順、燕青、花和尚魯智深、わけても私が恍惚としたのは、九紋龍史進であった」と回顧し、「私は、北斎によって、意味としての刺青シニエに到達したのであった」と述べている。

*

龍と言えば、火野葦平の『花と龍』がある。



一勇齋國芳画「通俗水滸傳豪傑一百八人之一個 九紋龍史進」
(国立歴史民俗博物館所蔵)

「ひろい石の浴槽に、客は、三人しかいなかった。<兄ちゃんは、きれいな身体してるなあ> 角刈りの男は、折った手拭を頭にのせたまま、つうつと、金五郎の方へ、寄って来た。…<ほんとに、色が白くて、肌理がこまかい。おれの肌とは大ちがいだ。あんたのような身体ほりものに、彫青したら、そりゃ、みごとなもんだがな

あ>…<兄ちゃんは、何年かね？><辰です><辰？ ほう、いい干支だ。おれは、巳の年だから、蛇を入れたが、兄ちゃんなら、ピシャリ、龍だなあ。彫りあがったら、惚れほれするぞ。おれのは、こんなに、汚ねえが…>」話は進み、酔いつぶれた主人公金五郎が目を覚ますと、同じ部屋に夕べ賭場でさいころを振っていた銀杏返しのお京がいた。「<金五郎さん、起きて、鏡をごらんさないな>…いつ裸にされたのか、むきだしになった両腕に、左右とも、絢爛たる彫青がほどこされてある。よく見ると、左腕には、黒雲をかきわけて、天に顔をあげている昇り龍、右腕には、地に鼻先をむけている降り龍、その二匹の龍とも、らんらんときらめく巨大な眼、弾力のある長い鬚ひげ、つき立った角、張りのある鱗、焰のような尻尾、朱でいろどられている蛇腹などが、ものすごいきいきとしていて、どちらも、前肢には、宝珠がつかまれている」

酔いつぶれて、寝込んでしまった金五郎の腕に、お京の絵筆により描かれた龍は、それから実際に彫られることになるのだが、龍の肢がつかんだのは宝珠ではなく菊の花であった。それは恋女房マンへの思いの菊であった。北九州若松の沖仲仕「玉井」組の親分金五郎は、葦平の

父、マンは母の実名である。その母への手紙、
「おかあさん、げんきですか。こちらは、つゆで、まいにち雨です。読売新聞の小説『花と龍』がはじまりました。おかあさんにきいた話など、作り事も、たくさん入れて書きますから、そのつもりで、おこらずに読んでください」

この小説は実話小説・ノンフィクションの趣を呈していると星加輝光が解説している。『糞尿譚』で芥川賞を受けた葦平は、昭和35年、52歳で急逝したが、後に遺族から自殺と公表された。遺書は「死にます。芥川龍之介とはちがふかも知れないが、或る漠然とした不安のために、すみません。おゆるしてください。さやうなら。あしへい」であった。

ちなみに芥川は、明治25年3月1日、辰年辰月辰刻生まれで龍之介と命名された。龍之介もまた、『大導寺信輔の半生』で述べているように、『水滸伝』に格別の思いを抱いていた。

*

実在しない龍がなぜ十二支にあるのか。中国では「辰龍」という。辰の字の原義と龍の関係は、中国でもなお学界の統一見解はないらしい。しかし、世間では辰の刻（午前7時～9時）にはよく霧が出るため、雲に乗り、霧を御すると言ひ伝えられる龍と組み合わせられたという説があるという。

2000年は21世紀の最初の年（21世紀の始まりは2001年のはずだが、まあそんなことは気にしない）で、特別な辰年とされた。このような偶然は3000年に1回らしい。それで前述の『中華龍』が出版された。「中国人にとって龍はいつも“高貴的吉祥物”でありつづけた。龍は中国人の心の中にあり、文化的現象」とその本は述べている。孔子が老子を龍のような人間だと嘖嘆したというが、その孔子のお墓の墓碑の上にも「灰碑帽」が乗っかっている。さらに、中国人はしばしば自分たちの国を“龍的国度”と呼ぶ。1980年代にヒットした「龍的伝人」、

♪遠い遠い東方に流れる川、その名は長江、遠い遠い東方に流れる河、その名は黄河。…古い古い東方に住まう龍、その名は中国、古い古い東方に住まう人々、彼らは龍の子孫。大きな大きな龍の膝元で育った、そう、ほくも

龍の子孫。黒い瞳、黒い髪、黄色い肌を持つ僕は、いついつまでも龍の子孫…♪

（鄭 高詠訳）

そう言えば、あの劉邦（漢の高祖）はまさに龍の子である。農民の出身である劉邦について、司馬遷の『史記』に、「父を太公といい、母を劉媪といった。かつて劉媪は大きな沢の堤で休息して、眠ってしまった。彼女は夢のなかで龍と遭ったという。この時、雷が鳴りひびき、稲妻が光り、あたりは真っ暗になった。太公が行ってみると、蚊龍が彼女の上にいるではないか。龍媪はやがて懐妊し、高祖が生まれた」とある。このように龍は政治にも利用され、帝王の象徴となり、「龍顔を拝する」とは、皇帝の接見を受けること。「龍袍」は、皇帝一族の着物で、その図柄は龍である。というわけ、北京の紫禁城は、王座、天井、柱、そして有名な石段などなど龍に溢れて、「可称得上是龍的博物館」である。

*

とまれ、そもそも龍とは何か。鄭 高詠はさまざまな説を挙げ、その上で、龍とは多くの動物の複合体であり、トーテムから神へと昇華したものであるとした。それは蛇のような体を有し、鱗で覆われ、背中に棘のような毛がある。4本の肢はトカゲ、足と尾は虎、指と爪は鷲、頭は馬からくだ、口と歯は鰐、眼は蝦（一説に鬼）、鼻は人間、耳は牛、角は鹿、鬚は鯨と『中華龍』にある。

中国、そして日本の人びとが、今なお龍を思い続けていることを、天空の龍が思い知らせてくれた。龍が彫り物の主役にあるのは、蓋し当然である。

（熊本保健科学大学・学長）

主要文献

- 1) 池上正治：『龍の百科』、新潮社、2000。
- 2) 蒼石（Cang-Shi）編：『中華龍』、中国電影出版社、2000。
- 3) 幸田露伴編：『南総里見八犬伝 前編』、博文館、1913。
- 4) 高島俊男：『水滸伝と日本人 江戸から昭和まで』、大修館書店、1991。
- 5) 玉林晴朗：『文身百姿』、文川堂、1936。
- 6) 鄭 高詠：『中国の十二支動物誌』、白帝社、2005。
- 7) 火野葦平：『花と龍』、講談社、1999。
- 8) 湯元豪一：『日本幻獣図説』、河出書房新社、2005。
- 9) 吉川幸次郎・清水茂：『完訳水滸伝』、岩波書店、1998。